



《移住を生活する》(2014~) 撮影：内田涼

初めまして。昨年「みなび」のワークショップ等に参加いただいた方はお久しぶりです。今年も「みなび」にゲストアーティストとして関わらせていただくことになった村上慧と申します。いま5月24日日曜日で、東京都三鷹市にあるアトリエでこの文章を書いています。本当は今日24日に山梨県立美術館にて今年の「みなび」キックオフとなるトークイベントを開催し、みなさんと一緒に、今年の活動をどのようなものにしていこうかという「作戦会議」をする予定でした。しかしこの新型コロナウイルス感染拡大の影響により、トークイベントは中止となり、今年の「みなび」も人が集まらないような形で、オンラインで実施することに決まりました。

昨年のみなびは、「美術館に住む？」というテーマを決め、ワークショップで「家」を作り、それを美術館内に配置することを通して、美術館を自分の場所にしていこうというコンセプトがありました。

「住むこと」について考えたことはありますか？僕は自分がどのような世界に住んでいるのかが知りたくて、家に関する作品をいくつか作っています。発泡スチロールの家とともに移動し、敷地を借りながら生活するプロジェクト《移住を生活する》や、内部に居室のある看板を作って、そこで広告収入を使って暮らす《広告看板の家》などがあります。



《広告看板の家 高松市美術館》(2019) 撮影：木奥 恵三

昨年の「みなび」は、そんな過去の作品を踏まえて企画したものでした。多くの方に参加いただき、楽しいプロジェクトになったと思います。しかし大人数で集まることが難しくなった今思うのは、ワークショップの中身も然ることながら、参加者のみなさんが家を出て、山梨県立美術館という会場に移動し、他の参加者と同じ空間で作業をして、終わったら家に帰るといった一連の流れが重要だったのだらうなということです。それが「みなび」を豊かなものにしていました。人が大人数で集まることが叶わないこの状況で、みんなが家に居ながらそれぞれにワークショップを行い、あの経験を生み出すためにはどうしたら良いのか、実行委員会の皆さんと考えました。そして今年は「自分の家をよく見てみよう」というコンセプトで「みなび」を行うことにしました。

ここ2ヶ月間ほどの外出自粛ムードの中、家で過ごす時間が増えた人は多いと思います。僕は料理をする機会が増えました。ジャガイモなどを育てたりもしています。基本的に、家はそうやって色々なことをして「過ごす」場所で、家そのものについて考えるためには、一度立ち止まる必要があります。家で「過ごす」ことは自然にできるかもしれませんが、自分の家そのものを見る、ということは意識しないとできません。窓の色、ドアノブの形、床や天井の模様、水道の蛇口や照明器具、または屋根や外壁など、いつも何気なく見過ごしていたものを、よく眺めてみてください。それはどんな材料でできていますか？どこで作られたものでしょうか？自分の家が、多くの人の仕事が集まることによって作られていることがわかると思います。自分の家でさえ、成り立ちを全て解き明かすのは難しいことです。

自分の家を見ていくなかで、みなさんが気になったものや場所を、絵に描いたり、写真に撮ったりして「みなび」に送ってもらえませんか？そうやってみんなの家の材料を集めて眺める場所をつくりたいのです。それが今年の「みなび」でまずやってみたいことです。そうして集めた材料を元にして、夏休みのころに、それぞれの家でできるワークショップを考えようと思っています。なにかご意見やご質問などあれば、気軽にお尋ねください。よろしくお祈いします。

村上 慧



「みなび」2019年の様子。撮影：美術館職員



次のページより村上氏のドローイング作品です。